



貞操婦女八賢誌三編中

~13  
2913  
8



2913  
8

昭和九年  
七月六日  
辨

貞操婦女八賢誌三編中

東都

狂訓亭主人編次

村田

第十五面

妬婦 妊身正室仇を  
聖法力を以て靈を鎮

再説をもち花衣の素生を悉細あふ尋ねる其爺親ハ左門と稱て  
馴ちる古那三郎が実父より母ハ左門が妾めて名を二輪木とて  
けりさるる花衣ハ三希と腹多りの兄姉ありきて彼三輪木ハ真実  
里のりり貪り者娘ありしが容色は依て素  
十七八歳の頃より白栴子の業を勤め諸方の人々招き酒宴の

女賢三編卷之三

興を催さるけつをひそ 細き烟を立ほそくしたてが父ちちの早はやく死して母ははの一人ひとりあら  
単老たんらうの末すえの遠とほくは暫しばし時ときありとも安樂あんらく中ちゆうなるいんこの心こころあり  
兼かねくより古ふる那な左さ門もんが波なみ是こゝと不便ふびんを加くわえしゆか頼たのて妻さいと  
ありはるか左さ門もんへ本ほん妻さいあれば河か節せつを見み合あせて家いえ内うちへ入いらん  
まが丈せんまゝの母ははのうとも今いまの家いえ居ゐて造つく作つくしてひきまきく結むす業ぎやう  
うしと其そのの當あたりどひ付つけられん世せ話わまきく多おほく心こころ  
安やす坊ぼうて今いまの酒しゆ宴えんの席せきもゆび左さ門もんとの大おほ切きるをさる  
るる心こころを用もちひ月つき日ひを送おくる中ちゆうのりり左さ門もんの種くさね子こを身みに  
胎た一ひと破やぶきもの好あむ三さん輪りん木ぎの風ふう情じやう毎まいの嬉うれしき中ちゆうの業ぎやうトモ

ままに細こうと隠かくまひの娘むすめをさう置おき左さ門もんの妙たごと告つげり左さ  
門もんも慌あわび一方ひつぱ多おほくは先まへのり本ほん妻さいの男おとこ子こを産うむさ及およびとをみ  
男おとこのつとど余あま一人ひとりの心こころ細こくし夫つまをまへ更さらに三さん輪りん木ぎの懐なごみ胎た  
噴くき聞きも最さい嬉うれしく河か節せつもゆびわ母子ぼしとも家いえの業ぎやうトモ  
養やしやうひて一家いっかの業ぎやうを偲しのむるさせん夫つまを樂たのしみ娘むすめもむつとく  
男おとこの甘あまいと母ははの心こころをうらなうらなう三さん輪りん木ぎの言ことばの末すえの妙たご  
はん妙たごと心こころの底そこを左さ門もんの妙たごとを思おもひぬき男おとこの言ことばの末すえ  
がらまゝ安やす堵とどみ又また恩おんをもちさうりけん折を折お節せつて三さん四し日にち或あるひの四よ  
五日ごにち日ひ夜やと續つけて三さん輪りん木ぎの家いえへ起おけし七しち厚あつき業ぎやうの教おしえを

女め八やち賢けん二に傳でんふ

母子の徳性之をさるるを實に世上の人心足らぬ物不足

發利のより意も又限る多きはハ行時をともせよとあるは

逢初より最深き逢激を恨み猶五里と我う罪状

つらもあつて末の松山浪も越を歎きまらうが多しあり今け條

下と獲らぬひて婦女子の慎とある人々一 左門下り山

何も氣のあら悪くいざあもせんが身 胎身の初為り起居が不

自由ッて仍ませんハ 左へ振り交へられしとも太儀ごらふヨ此

身も何程の案と居るけいとも産居るうの男もあつとも

つらもあつて末の松山浪も越を歎きまらうが多しあり今け條

下と獲らぬひて婦女子の慎とある人々一 左門下り山

何も氣のあら悪くいざあもせんが身 胎身の初為り起居が不

自由ッて仍ませんハ 左へ振り交へられしとも太儀ごらふヨ此

身も何程の案と居るけいとも産居るうの男もあつとも

つらもあつて末の松山浪も越を歎きまらうが多しあり今け條

下と獲らぬひて婦女子の慎とある人々一 左門下り山

何も氣のあら悪くいざあもせんが身 胎身の初為り起居が不

自由ッて仍ませんハ 左へ振り交へられしとも太儀ごらふヨ此

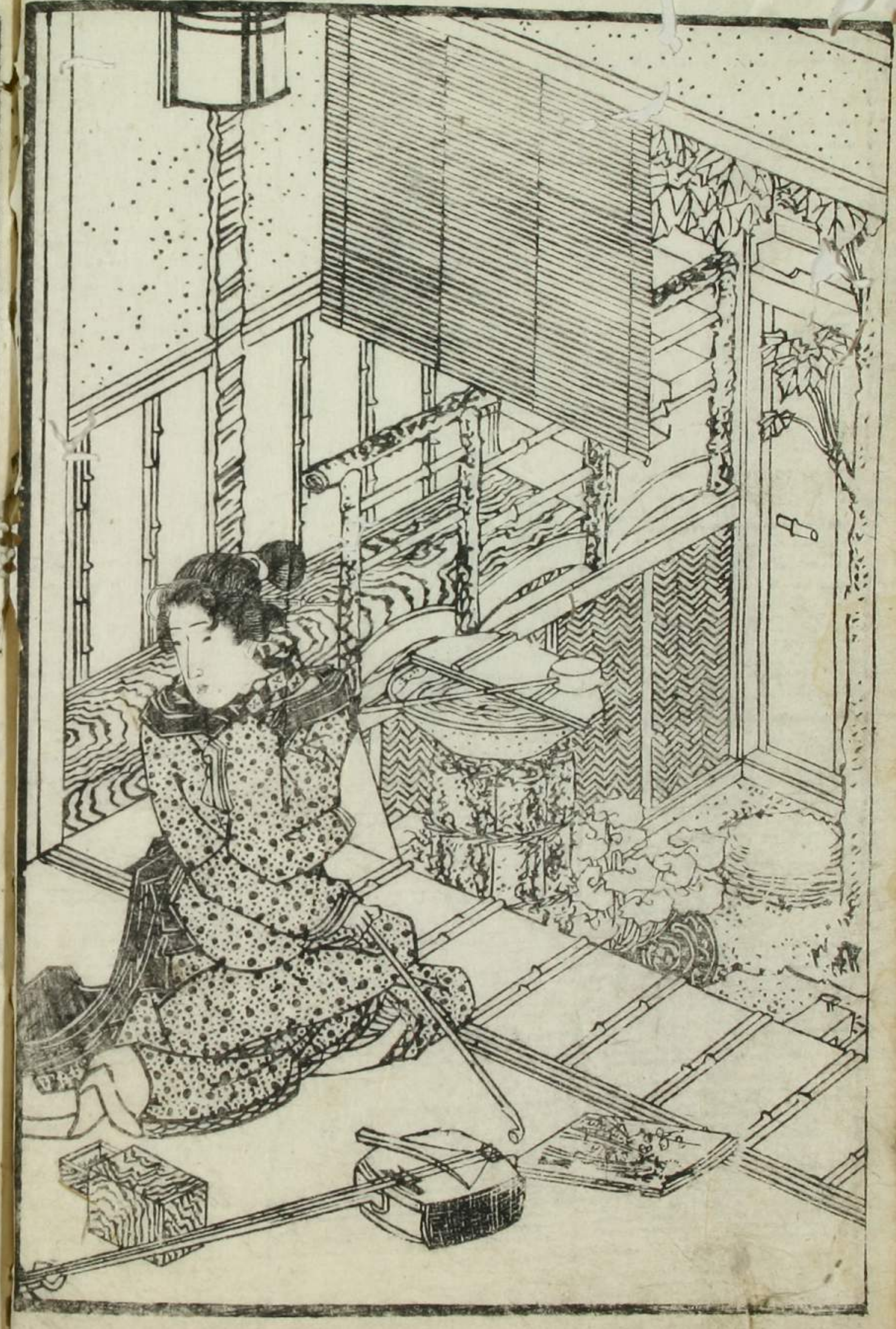
身も何程の案と居るけいとも産居るうの男もあつとも

つらもあつて末の松山浪も越を歎きまらうが多しあり今け條

下と獲らぬひて婦女子の慎とある人々一 左門下り山

子ト左門の所せ着つて 平アノ子 左ノ免 三ノ中 平ノあは  
只松が後初小お関中メのせおぎあもは子アノウ 此本妻が  
法此座るのこ松の根る者でも正室ホ一七迄下は居る 左  
今の根よ妻ええるる其方の儀 次第で何花とも居る  
けきど當時の所云何花も詮方がある 三ノ左根る只今も恐  
るる山正室ホ若もの妻がこぎあも一アノ必ぎをい言葉をい  
こぎれを成はたナエト念成おしる女の痴情左門へのとから  
ゆふ當ほど病人の氣は障らんも如何るまがま日ハ機嫌よく  
家ハ掃りしが獨情思ふ根三輪木の生質斯まホ癡ありと云  
推量ざりし我本妻の故障をあるといふもあ有まどけきども  
婦女のせまき心中より万一の根の所爲を巧まて家ホ保る悪名  
在我代も立むも不快まりとそまをぐふ我種子を懐妊てあらに  
別離て餘所あるさんも惜るま業より免やせん角やと思案を  
做まホ只以來ハ往來を疎く一自ら愛念の薄くあるようふ  
たうものかハ有まどとそまより例日の如くふ不ゆ只折節の  
音信ハ文をど送るを安否を尋ね家内の美用を言てそく兩  
月むり短る一けら其頃左門の正妻あり一楓といふが種  
臥て更ハ所師の業ふ不及妙薬といども効驗あけま夜中の

女賢一輯卷之二



東 一方をむね彼是と評すまほも病根何をもころりごとく  
數人の良医の思案よめて日増花の姿ま枯木の根を瘰  
衰へ内外の知己氣の毒の思ひぬ者もあらざまば左門を  
冥子よりける三郎の孝心うきものる由初子けまほも老突  
昼夜どうも母の側を去まおちくまるま急まなり此節  
異る楓の容体氣質ま平生小まうて荒くく殊小突  
子の三糸を憎く叱るまどするま甚くく邪見の形容を顯し  
けまば左門の心中の思ひ當まるま又ありける由近き山林の  
引籠りま法まませし聖僧の許のりり邪崇をまら除き  
貴へんと其草庵のまけま奇まらるる此聖僧へ神通力の  
尊者ありけん左門の言葉ま待まし七 聖イヤま色へま古那  
の長者まゆら内室の病氣の祈禱のまで泰らまららる  
サるく山同道中ままざらる今隠居のりてもえへ因家のその  
四家兼て噂の聞ましよ下りて左門へ呆まらるの傾く連立  
家へ歸り被阿闍梨の指掌に隨ひ病人楓の前  
金剛密具を如法に安置し阿闍梨の呪文を唱  
う置漫の他人の出入を許まど呪の祈禱の法  
るふ鈴を打まらる大喝一聲眼をひらきて檀の

文賢三編卷之二

あまもや人間の執情一念は動けぬ阿鼻の炎盛は焚火の  
鬼卒地下の怒る汝の我をわらむとも我能汝を悟つるぞと  
奈は隠れとも不動火界の咒文を以て汝が邪心の居所を焼く  
よの谷の土下責めて声も烈しき老僧の法力空しくも七楓の  
怒り身をさうへし左門を着て潜然とうち敷き 楓アモウク  
お祈りせぬ幸お許を成て下す 今も包を隠しまゝ  
心を改めてやまたしりし声音の楓ありて左門の兼て覚悟あり  
三輪木の音声は相違もけし左門の思ひを膝を進め胸を痛め  
て猶縁は阿闍梨の念咒の文を寛め 少くも許さるるか

から夫人を隠すは左門殿のいふ変ありて早くとて立退け  
慈悲の詞不合学す楓が容体はろろねど声はうらふ三輪木  
みて 三左門まゝ今いふをうらうらとやませし実私に三輪木で  
また嫉妬の女の謔をみるがうか種子を姪しとま後うらと本妻が  
うらひの極う私の極る者でも貴君のお側小居らませうらと  
存じまゝ一念が私うらひをまゝ楓さぬの心身小徹し  
竹筒甲の内蔵を只今の私のおらうで其極る変は思ふいと存じ  
しりても一旦發し私の罪障が重うごまのまの自由小進退も  
御来はせむ此嫉妬の罪咎て後生へ緝青鬼といふ鬼小生らる



誰が言の葉う耳根へ貫ぬる心うしき何卒か慈悲の智人  
の御追福をか願ひ申上るはさか種子を産すても内家へ  
引取は下すはるる切てけ身の産すとも小児の身を浮苦勞  
さするが内家の仇せし三輪木が罪を滅しまた生理の不便  
は内坐させうが左振るさうては下す何を申上るはもて身を  
るやまた罪の貴か名残をしる何振せうといふを思ふはあ  
楓の幹へ糸の上へ倒して正躰るうしか彼聖人の祈念は依て  
夢の如くは全快して病中の更はいさくも知らば又左門も  
楓の告ねは三輪木の更もその頃へ絶て沙汰るくはせしを  
亦三輪木の家をいふ古那の祈禱の節よりけん母にさく

お三輪やくくもせま振る出しは更せするのぞ目と覚し  
アリ怖るる夢う子へ母一夢う子と言ふそは母が知るもの多  
異なる更成言嬢ごヨフか先刺う呼覚しこのを知ら  
るのうそし何ぞ怖ひ夢を思ふのえ三アモウく怖ひとも  
苦いとも言根のるひ更てありまゝは卒湯でも水でも  
少くは呉れナトといふを聞より母親へ今煎トする夢を汲  
アそ介抱し臨月近き娘の病氣のさうり慰めるけり三輪  
木の夢の忍びうりのさう心徹せ嬢垢の罪かひの廻せを

文賢三轉卷之二

八

おそろしき古那の前後我一念の執りも根まぬ着崇  
病苦小腦まきさるぐの非道まを言罵贈らき所爲を  
のせし上へ奈何不便と思ひ一人も愛相尽さるまを死  
我いふも知らき因果の業々情々現在母も斯あてしを  
さるしもあるぬ夢の体相つて罪の悔し胸の苦し  
身の咎死ゆるがまのりあんと今死行へ懐妊の赤子を  
闇の迷へせ又猶さるの罪ともるべし免角も身一を  
置野る葉末の露らくも消る影をりの歎まよも有  
ましと親を思ひ子を案じまらる重る産婦の脳を後女

児を産けらぐ斯歎きの積り一ゆあまや初児と跡に残し三輪  
木へ竟れ世滅去るぬ母の悲しき限るけし娘の詮方  
あひひそふ他人を頼りて左門の告が左門の不便小思へど  
内外の者の蔭言も家の恥ごとく得てひそふ三輪木の母の詩へ  
月日をも料を贈つて彼初子を育させしその赤子を  
お花の母の祖母の介抱糸畧るけしは出氣もあを育ちし  
お花の三才あるりける年祖母もさるるり後お花の便  
身とあり養ひ親のゆみありて果へ古那の縁も切し運  
ころくして松戸るる千葉元の娼妓とありしを新て古那の

三郎の代とあり真柴といふ妻もあり又勝美といふ妻もありが  
不圖花衣と見初しより妙と知れ通ひし花衣更の情を  
三希と側にも寄せねば意氣地とありて身請せんと思身元と  
探り同ひし山豈とありんや亡父左門の妻ありける三輪木の  
腹の出生をせし娘も同ト撞る妙ありと聞て大ひに驚きしが  
妙とありて猶更の捨もかきぬ亡父のうらみと思ひあつり  
春造の妻も岡傳へまが倡家より引とりてとむの底末とせり  
深くたうりしうらみは彼花衣の入水せしをいさよる後の巻と  
重ねての龜の傳ふとささくあつり

第十六回

錦旗を呈して真弓花之方近  
長谷寺の境内に於陸茶を嚮

爰に仙ト神女真弓推名於道に益蔓錦の旗を降て鎌倉小坂に  
便宜を索も扇ヶ谷の奥方花の方へ呈し益森觀世音之奉納せら  
る御戸帳小用ひのらんまは成告奉て其恩賞うら山側近く給は  
る夜よりと獲ひけまは花の方へ大ひに喜悅多し唯山内の奉納は勝へ  
る事と奉り合つる切なる者との賞美ありて深くも於道の事と見  
らる直に從女の中より召出せしめて安置かく古泰ふらるるは  
のひら於道に天性の美質ありて扇ヶ谷の奥方へ給はせり女中の  
女賢三編卷之二

首の髪は色も艶も初て見奉る折節、  
 けしき髪形容よく化粧の風体も最なり、  
 女の髪は艶も髪も御殿の人々左も右も留り、  
 けしきの節に至つて最初の化粧と云ふも、  
 尊位威と備へ素顔の白く艶潤さる、  
 花の方をさへもさへて、女中の栄、  
 自然と於道へ威と取られ會釈も、  
 用ひて上を教へ侍輩は、  
 花の方の内側さへも流女是を、  
 近づき父の仇を復さんと思慮を、  
 墨小針さ文より河肥不順曆と、  
 期をこそを不待り時にも、  
 御戸帳をはさめ此月の十七日、  
 前由井の濱に船飾整へて、  
 るる船長篙工の外ハ男子戎船、  
 と思ふ者何れも自化平等の、  
 前日より其旨を觸示さ、  
 群集して未明より船出と、

迎講中るんどもあはるゝ等一 這何故上徳國へ送るる戸帳  
仰々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
不全く我々の所業るまは追善菩提の本意はあはる山内  
奉納あり一蜀江の錦の御戸帳も勝る古板毒類の珍物  
錦の御戸帳と扇ヶ谷の奥方より上徳の望森へ奉納せらるる  
弘く言觸さして山内の威を折く竹の底の巧く密に推量もの  
と三月初の七日巳刻の頃よりして兼て用意を調へる花の方  
御座船より大サ九八間なる港板の方より艦の方より至る迄  
全奥より二階造の上下より障子を立て紫文白の幕を張渡す

麗莊觀目を終るる形容多し亦奉納の御戸帳をバ一艘の異船  
と高く修造三重の頂上紫の天幕を張て這所入甚曼錦の御戸  
帳を崇々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
焼香紙許一各木一柱とほゆる者各名目と記して永代望森寺の過  
本帳小留て現當二世の安樂を祈るべしと奉詣の男女は  
久這八有るた此遊り多斯御法の折節は下さぬの我より上と  
は善哉の心を發して此のものの成倍養するを許す  
香料を惜むべしとて由井が廣く集る貴賤の男女は  
遷りての事を圖傳市中の道俗信者如羅沈香を携持て這所

彼所より小船小舟を岸を沖へと五六丁隔て礎を下し船樓を  
當りて之を付く焼香の時刻せりすも暗やうなり斯てきし鎌倉  
なる花盛場まさきと申し靈地も清淨法場大慈大悲の境内ハ廣  
大毎辺の市利益と春暮秋冬嫌ひるる茶請下向の群集して押合  
人の申見世やうに楳び人形蒲高軒を並べて般衆の聲言て言ん方も  
る賑々御堂の西東輝も不祥も汲分て此の煎茶の色もよくて  
競ふて水茶店の最數多る處女等も笑顔つくり愛相小引にて  
尻も長尻元竟浮きまて喜瀬川や長き日影江宮九川今歲悉く  
樂しき是も他生の縁よる皆其の思願連客絶間のふり中

船底のち亀と鳴き入る頃名をきき候はんし女元ハ武蔵  
の石浜中く舞子をあせし老あるがこふ海をききあま  
相換臨さしと賑きり今強倉小身を落付けし所不  
茶店を出せしより中ご我姓もあつされと古今小  
稀なる艶色ゆゑ見がぬ小胸を食し心を痛めし所長  
ハ浮する度あど言ひくつる為客さしまうりしとちごも  
鬼ハさう小丸を移さば唯よまわさ言ひありて度小  
日敷を修るやど小今日ハ疎きり由井か淡小那船樓の  
僅ありとくび迎り三魁しこれハ客待難小早なり

廊をひらき居る所へ六十支をりのひらりの老女  
 四辺入りり一店先より入つて所迎する林川小橋  
 を打脚くお龜小対ひお會笑發の傍りの老妻ある  
 と衣領の襟袖の質素を養ふと成つて扱言ふやうお佛  
 が慥く身より子細ハ縁くお前のお話後小鶴村が崎の  
 女原居真間の愛嬉のおを安へりま様しい動ゆても  
 出な公が為るこゝろおとておとておとておとておとて  
 氣を挫ぐ那方さぬの松子を岡小あのは原居ハ日外  
 より扇が谷家へお入り大僕でも及ばぬ勢へまおるお

小鶴妻が長トあるとある樂々もまをゆるせし  
 此頃ハ若流の舞がなすこゝろ男の思ふごとく舞のふふ  
 固くお若を抱へてと強念中を尋ねるより一を船を  
 召佛が思入おふお前も元ハ石炭が舞子をわよとの  
 鳴る小若こゝろお前の松子を足る小立振舞あるや  
 習ある男とらふとも取れぬか前の子姓と知  
 るおあふ召佛が振向ぐお前をば後小若流小りり入  
 那かお安へりこゝろお前のお若也男と通をり  
 小も何んか前の知れ何様と言ひ進てお龜ハお安

何時の頃か前の位切候令妙何なる愛取乃を  
 ても一度愛嬉さぬ小お目小かりと唯一言のひさし  
 があるゆゑ小お前を噫と甲斐ありと便宜を  
 うる様一きよと那方さぬ小違ひと若虎ハおろ  
 奴もけ身をすつる不厭り〜とて不計ふのありれ  
 よと用と老女も笑げふお前が然るゆゑ先  
 何程ともは流が舌三寸で言ひせらば必を任せし  
 多んせと言ハバも龜も合笑とけ身不致ハあはれ  
 女子の身ありと大とと候も男と姿を二人を偽

く配う〜さよと言ひつ〜流ハ狗の中さふらぬぬの  
 うを吏を金所ハ知〜と〜と吸ハ付〜と長策  
 の素世苗もうさを忘世州老女ハ海き事情を知るや  
 白髪之光の身を最冥面〜気ハ付〜と素世苗を  
 とり〜完ル中不再生ハ龜不打對ハお前の利後を  
 知りま〜言ハも思〜と〜と時とさ〜と管原家  
 の内意小叶ハ〜愛嬉さぬ必を素相のありや〜不を付  
 へ何処身也男の本意を忘〜と〜と地ノ又事不〜と  
 と〜ア〜の舞の舞の一も不為と〜とを落付て〜と



更らる助太刀不ある人をくさすひと 大更を取る  
本屋をと言ひまゝに 龜ハ小襟をせめてんまゝ  
何もうも委しい子細をほお知てお佛を引あさる  
と言ひばお女八目おりちり涙を袖まゝ押城の前  
向らまゝに箇松くくともも面うれお佛がのうへ始り  
お佛ハ中総の真間の里お位徳一綾一お老の毒あり  
しんが命まゝに支子を亡失堀りてまゝよりもまぐやく  
お義のち柄お前のお公三郎さぬの出生のひし時まゝ  
吾佛お乳房のあるを侍お父公の乳母お抱らと何お足

おれたおとありくお思の中お幾松月送る恵もお知りあ  
かゝ思按の外とくおやお家の若黨小忠三とまひお  
お思思らまゝに 松のその敷ハ阿漕お浦お史綱の度  
おまゝお人目おもまゝに 浮名お詮方まゝに三郎さぬの  
十二の車二個おせうおお家を多退きおりの知者をお  
不武花の芝浦お身を落付史ハ綱引の所をおり  
佛ハ僅らの役仕事或ハ人お雇ひまゝに 細無煙  
をまゝに侍あき時まゝに 小忠二か風物のお枕と打脚  
お次お小まゝに 病お小兼脚の甲お變もあゝお七早お

黄泉の鬼とあり 獲ふ木蔭も是後の日津小き人  
作らば け後食ふまをさすひ来つ 始むをさす ば古  
人の目をもさすあり 西母をと思へば 再度交ふ始む  
づしふお別る 針持の業を後世と 子一箇の口を  
中 ありつ 亦徳をよりを送る 中も先非を悔りぬ日迎も  
ろく 何年今一回息あるうち 古奈 燃るあかのお家小侍  
糸をと思へと 罪あり け後由をさす け後 け後 け後  
附陽を押し け後 風使小使け け後 け後 け後 け後 け後  
その子細ハ耶お 毒のとりお け後 け後 け後 け後 け後  
も四五個連立と け後 け後 け後 け後 け後 け後 け後 け後  
おんろき け後 け後 け後 け後 け後 け後 け後 け後

作者曰 是より 亀の身のありぬ 最長く  
しき 変なれば 今け 後 後 後 後 後 後 後 後 後 後 後  
て 細く け後 け後 け後 け後 け後 け後 け後 け後 け後 け後  
念せと 解るけ け後 け後 け後 け後 け後 け後 け後 け後 け後

利田

貞操婦女八賢誌三編中

女八賢二輯卷之二

